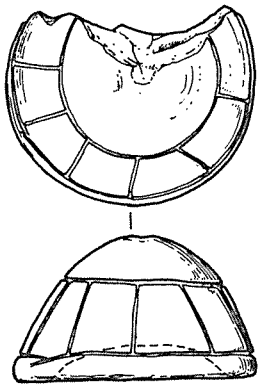
東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報16

馬場川遺跡発掘調査概要
Ⅳ



半球状土製品(1/3)

1 9 7 6

東 大 阪 市 教 育 委 員 会

はしがき

馬場川遺跡は、本市横小路町３～４丁目に所在する複合遺跡であります。

本遺跡は、縄文時代晩期の代表的な集落跡として周知されておりますが、特に昭和44年以降の調査で炉跡・埋甕などが発見されるにおよび一躍注目をあつめる遺跡となりました。しかしながら、土木工事等による遺跡の破壊が進むにおいて、事前の発掘調査が必要不可欠となってまいり、昭和49年度に引き続き本年度も国庫、府費による補助事業として発掘調査を実施いたしました。この結果、馬場川遺跡の開始時期の土器類が多く発見され、馬場川遺跡のはじまりを考える上で大きな成果をあげることができました。

本遺跡は、畿内でも数少ない縄文時代集落跡として重要なものであり、今回の調査で遺跡のはじまりがすくなからず解明されたことは大きな成果であり、今後さらに調査をすすめることによって馬場川遺跡のナゾが解明されていくことと思います。つきましては、本市教育委員会においても遺跡の保護・調査・研究をさらにすすめていきたいと存じております。

最後に今回の調査の実施にあたって、ご協力をいただいた関係機関、学生諸氏及び土地所有者の方々のご好意に感謝いたします。

東大阪市教育委員会

教育長　小林　俊一

本文目次

はしがき
第１章　調査に至る経過……1
第２章　位置と環境……2
第３章　調査の概要……5
　１．Ｏ地点　層位……5
　　出土遺物……6
　２．Ｔ地点　層位……12
　　出土遺物……13
第４章　まとめ……16

例　　言

１．本書は、東大阪市教育委員会が、昭和50年度国庫補助事業（総額 2,000,000円、国庫50％、府費25％）として計画し、文化財課が担当し実施した馬場川遺跡の緊急発掘調査事業の概要報告書である。

２．調査は、昭和50年 8月 2日より昭和50年 9月16日まで現場作業をおこない51年 3月31日をもって整理作業を完了した。調査の実施にあたっては、土地所有者の松原秀男、北岸千太郎、寺脇保夫の諸氏には大変お世話になった他、横小路町自治会、東大阪市遺跡保護調査会の協力を得ることができた。記して感謝の意を表したい。

３．調査は、松田順一郎氏及び近畿大学考古学研究会の参加を得て、下村晴文が担当した。本書の執筆は、下村がおこない、遺物の実測を松田が、拓本を井田和太がおこない、遺物写真については東大阪市遺跡保護調査会の上野利明氏に依頼した。

４．本書の作成にあたっては、京都大学中村友博氏の指導・助言を得た。記して感謝の意を表したい。

挿図目次

第１図　馬場川遺跡周辺位置図……3
第２図　Ｏトレンチ北壁断面図……5
第３図　中津式土器ａ・ｂ・ｃ類土器拓影……7
第４図　馬場川Ｏ式土器ａ・ｂ・ｃ類土器拓影……8
第５図　馬場川Ｏ式土器ｄ・ｅ・ｆ類土器拓影……9
第６図　無文土器、石器類実測図……11
第７図　Ｔ－１・Ｔ－３トレンチ北壁断面図……12
第８図　Ｔ－４トレンチ北壁断面図……13
第９図　土師器実測図……15
第10図　馬場川遺跡地点位置図……折り込み

図版目次

第一　調査地点　１．Ｏ地点調査前の状況
　　２．Ｏ地点調査風景
第二　Ｏ地点土器出土状況　１．中津式土器ｂ類出土状況
　　２．無文土器出土状況
　　３．浅鉢形土器出土状況
第三　調査地点　１．Ｔ地点調査前の状況
　　２．Ｔ－４トレンチ北壁断面
第四　縄文式土器　１．中津式土器ａ類
　　２．中津式土器ｂ・ｃ類
第五　縄文式土器　１．馬場川Ｏ式土器ａ・ｂ・ｃ類
　　２．馬場川Ｏ式土器ｄ・ｅ・ｆ類
第六　縄文式土器・石器類　１．無文土器
　　２．縄文式土器底部
　　３．無文土器、石器類
第七　土師器　１．小型丸底壺、鉢形土器、高杯形土器（杯・脚部）
第八　土師器　１．甕形土器

第1章　調査に至る経過

馬場川遺跡は、昭和44年以降何回となく発掘調査が実施され、大きな成果をあげてきている。昭和44年度に実施した調査では縄文晩期の住居跡・炉跡4カ所・埋甕などの遺構とともに、厖大な量の縄文晩期の土器、石器、土偶などが発見され、空白的な畿内の縄文時代の資料を埋めるものであると一躍注目を集めるようになった。[1] 引き続いて昭和45年度には、範囲確認調査が実施され，南北約 250m、東西約 300m の範囲に広がる、縄文時代中期末～晩期初頭にまたがる遺跡であることが明らかになった。[2]

昭和49年度には、D1地点（横小路町434番地）での調査で、縄文晩期初頭の遺構を検出し、動物形土偶、宮滝式の土器、多量の石器などの遺物を発見し、資料を追加するとともに上層では弥生時代後期の包含層を確認し、この時期の素掘りの井戸遺構1基を検出した。弥生時代の遺跡は、S地点を中心にN地点まで広がり、縄文時代遺構と重複しその中心部分に広がっていることが明らかとなった。[3] また、横小路町 744番地での住宅建設に伴って発見された、2基の井戸遺構内から出土した土器は、弥生後期末から庄内期に入るものであり、井戸内からの一括出土であることからも重要な資料である。[4]

このように、馬場川遺跡は縄文時代中期末～晩期前半にかけての遺跡と、弥生時代後期の遺跡が重複し、比較的良好な保存状態で残っていることが明らかになった。しかしながら、遺跡周辺にも開発の波が押し寄せてきており、これらの開発から遺跡を守るためにも発掘調査を先行して実施していく必要が生じてきた。このため、東大阪市教育委員会では、昭和49年度に引き続いて、50年度も国庫及び府費による埋蔵文化財包蔵地緊急調査補助金の交付を受けて調査を実施することになった。

今回の調査は、東大阪市教育委員会文化財課の担当で、東大阪市横小路町406-2番地（松原秀男氏所有地)、横小路町3丁目 736 番地（北岸千太郎氏所有地)、及び横小路町3丁目1157番地（寺脇保夫氏所有地）について、昭和50年8月2日から3月31日まで実施した。

調査の実施にあたっては、土地所有者の松原秀男氏、北岸千太郎氏、寺脇保夫氏には調査をすることを心よく同意していただいた他、何かと御援助をうけた。また、横小路町自治会（会長水谷丸寿彦）からは、事務所として横小路町会館を使用させていただいた。東大阪市遺跡保護調査会からは調査についての全面的な協力を得ることができた他、現場で直接作業していただいた学生諸氏[5]の参加によって調査を完了することができた。

これらの方々、諸機関のご協力、ご援助に対して記して感謝します。

(1)　東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報4「馬場川遺跡Ⅰ」1970年

(2) 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報6「馬場川遺跡Ⅱ」1971年
(3) 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報14「馬場川遺跡Ⅲ」1975年
(4) 現在、東大阪市遺跡保護調査会で整理中である。
(5) 松田順一郎、飯塚典正、高山正久、伊藤　晃、宮本栄一、杉本直三、玉置正博、渡辺良平、平井康博、中辻英民。

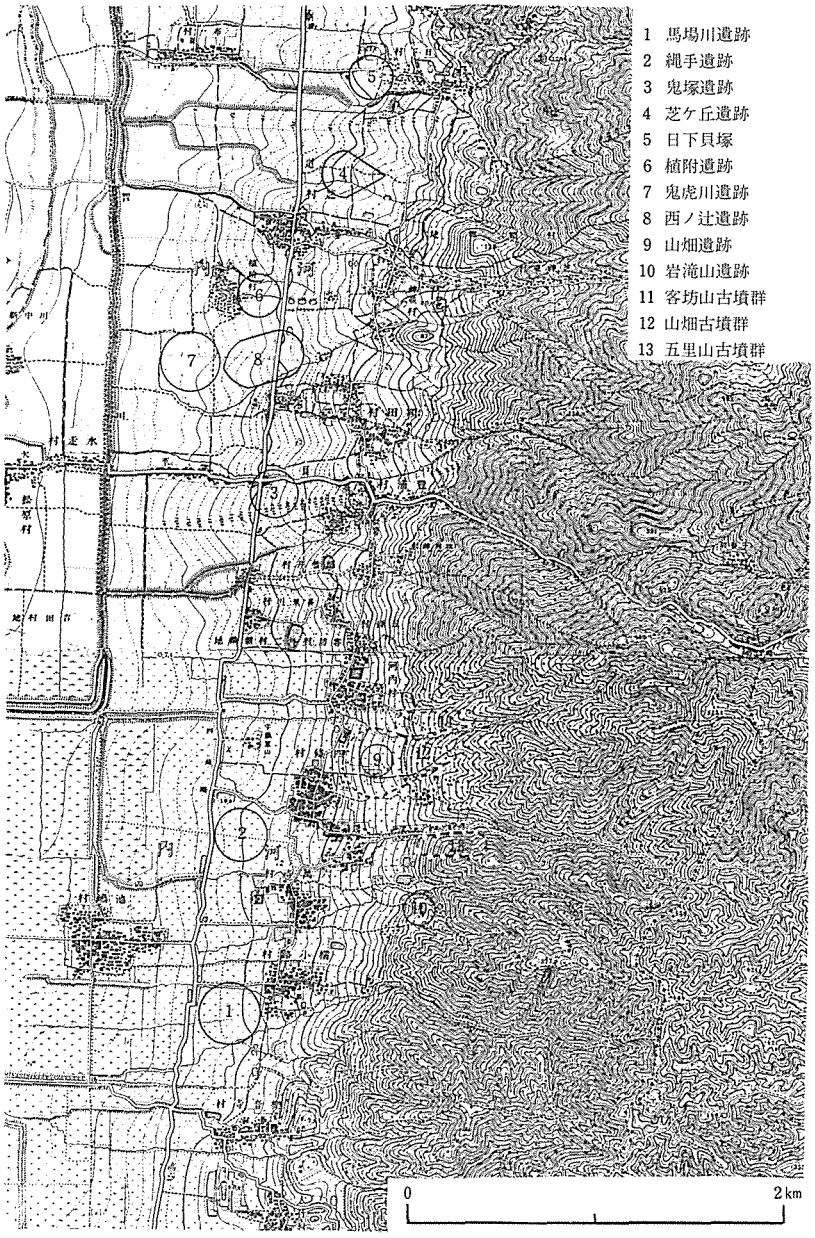
第2章　位置と環境

馬場川遺跡は、東大阪市横小路町3～4丁目に所在する縄文時代から古墳時代にまたがる複合遺跡である。

遺跡は、生駒山地のふもとにあり、生駒山から西方に派生するいくつかの谷川によって形成された複合扇状地の末端、標高15～25mのところに立地している。北を大門川によって区切られ、南を其後川によって区切られた一帯に遺跡が広がると思われ、最近まで東大阪市域では珍らしく田園風景が残されたところであった。しかしながら、昭和44年頃から開発が進み、工場などの建設が相次いでおこなわれ、現在でも住宅建設が激しく、この景観を変えつつある。

開発行為の増加により当然発掘調査も多くなり、馬場川遺跡の規模、性格なども明らかになりつつある。馬場川遺跡の始まりは、現在までの調査で縄文時代中期末、後期初頭に求められ、晩期になって大規模になったと思われる。この時期には、生駒山ろくのふもとには、扇状地上標高20m前後に点々と縄文時代の遺跡が認められる。まず、馬場川遺跡の北約1Kmのところには縄手遺跡が存在する。[1] 縄手遺跡は、馬場川遺跡より早く中期頃より始まり、後期になって大規模になった遺跡であり、縄手遺跡が小規模になるころに馬場川遺跡が大規模になっていることは両遺跡を考える上で興味深いものがある。縄手遺跡出土の土器が、関東、瀬戸内地方と密接な関係をもちながらも、縄手・馬場川遺跡と時期をへることによって独自の縄文文化を生み出していき、弥生時代へと連続して引きつがれていくことが考えられる。このことは、縄手遺跡の北約1kmに位置する鬼塚遺跡から弥生時代前期の土器と縄文晩期の土器が共伴することでも、当地方の縄文文化から弥生文化への変遷をうかがうことができる。[2] この他、最近の調査で後期から晩期にかけての土器が出土している芝ケ丘遺跡、[3] 晩期の貝塚土坑墓などが発見され、国指定史跡になっている日下貝塚[4]などがあり、これらの一連の縄文時代遺跡が標高20m前後の扇状地の末端部に並ぶことは、縄文時代中期以降の生活地として適していたと考えられ、馬場川・縄手遺跡から発見される多くの土錘が水辺の集落跡として栄えたことをうかがわせるものである。[5]

弥生時代に入っても生駒山ろく地域には多くの遺跡が存在し、特に中期以後は爆発的な増



第１図　馬場川遺跡周辺位置図

加をしめすようになる。鬼虎川遺跡（中～後期）[6]、植附遺跡（中期）[7]、西ノ辻遺跡（後期）[8]、山畑遺跡（後期）[9]などはその顕著なものである。また、縄手、馬場川遺跡のように縄文遺跡の上に弥生時代の遺跡が重複して断続的に集落を形成する例が多く認められる。特異なものには、岩滝山遺跡のように標高80mの高所につくられる遺跡がある。[10]この遺跡は、河内平野、大阪湾、六甲山頂の方まで見渡せる眺望のよい立地にあることや、畿内第5様式の弥生式土器だけを出土する単一時期の遺跡であり、竪穴住居跡2基が発見されていることなどは、いわゆる高地性集落の定義にもあてはまるものである。弥生時代には、河内平野にも人々が住み始め、瓜生堂遺跡[11]、亀井遺跡[12]などの大遺跡が前期の段階にすでに出現していた。これらの生駒山ろく地域の遺跡と平野部の遺跡との相互関係を究明していくことが今後の課題であろう。

古墳時代に入っても弥生時代とほぼ同様の傾向が認められ、馬場川・縄手遺跡においては、土師器、須恵器を出土する集落が、縄文・弥生時代の遺跡と重複して認められ、相変らず断続的に遺跡が続いていることが明らかになっている。また、古墳の築造も山ろく地域に6C～7Cにかけて集中している。山畑古墳群（約50基）[13]、客坊山古墳群（約10基）[14]、五里山古墳群（約4基）[15]などが小規模ながら扇状地上に連続して認められるが、前期に属する古墳は、八尾市花崗山古墳などあるのみで、東大阪市域では現在までのところ見つかっていない。

このように生駒山ろくは、縄文～古墳時代にかけて多くの集落跡・古墳が認められ、これらの遺跡が断続的ながらも重複して存在することが明らかになりつつあり、今後相互関係、時期的に空白な部分の調査が進むことによって、縄文～古墳時代に至る連続的な流れを把握することも可能なように思われる。この反面、重複関係によって遺構の残存状態は非常に悪く困難な状態が多いが今後さらに詳細な調査によって明らかにしなければならない。

注(1)　東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報9『縄手遺跡Ⅰ』1971年
(2)　藤井直正・都出比呂志『原始古代の枚岡』1966年
(3)　昭和47年、50年度に実施された石切中学校校舎増築に伴う発掘調査で縄文時代後期、晩期の土器が発見されている。
(4)　東大阪市教育委員会、「埋蔵文化財調査概報7」『日下貝塚』1971年
(5)　梶山彦太郎、市原実「大阪平野むかしむかし」『国土と教育』18号
(6)　島田義明「弥生時代木棺の一資料」『河内考古学1』1967年
(7)(8)(9)　注(2)に同じ
(10)　藤井直正、北野　保「東大阪市岩滝山遺跡の調査」1971年
(11)　瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡Ⅱ」1973年
(12)　大阪府教育委員会『亀井遺跡発掘調査概要・Ⅱ』1972年
(13)　東大阪市教育委員会「山畑古墳群1」『東大阪市文化財調査報告書　第1冊』1973年
(14)(15)　東大阪市教育委員会『東大阪市における埋蔵文化財包蔵地の現状1』1972年

第3章　調査の概要

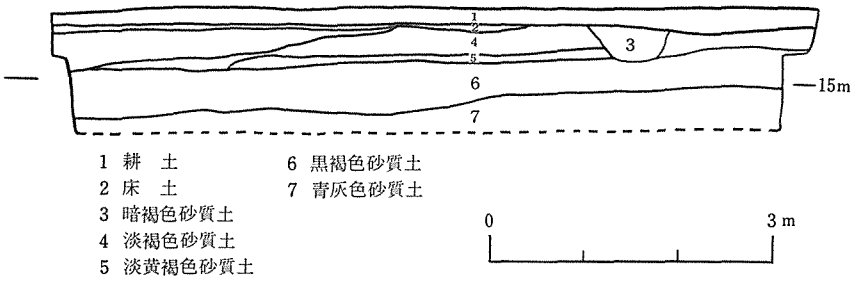
調査は、まず従来よりO地点と呼ばれている、横小路町406—2番地の土地について実施していくことにし、従来の呼称そのまま使用し、O地点と呼ぶことにした。O地点は、馬場川遺跡でもっとも西端の地点にあたり、旧国道170号線（東高野街道）沿いの近くになり、標高約15mに位置している。

1．O地点

O地点での今回の調査範囲も約 200m²とあまり広くないため、土砂などの置場を確保する必要から、まず東西2m×南北10mのトレンチを設定し、土層の状態、遺構の状態を観察することにした。この結果、地表下約50cmで遺物包含層が検出され、約1mまでの間に堆積していることが認められたが、包含層は断面観察の結果では層位的な区別はできず、単一層と思われた。また、遺構等も認められなかったため、トレンチを拡張してO地点として調査を進めることになった。

層位

扇状地末端部に位置する今回の調査地では、縄文時代遺物包含層が地表下約50cmと予想外に浅いところからの検出であった。第3層（褐色砂層）が厚さ約30cmで東から西へかなりの傾斜をもって流れている状態からも耕作によりかなり上面を削平されたものと考えられる。第6層（黒褐色砂質土）は、厚さ約50cmでゆるやかに東から西への堆積状態を示している。第6層と第7層（青灰色砂質土）とも境は断面で見るほど明確なものではなく、自然に変化していくように思われ、二層とも砂質の堆積である。第7層直上も東から西への傾斜をもってい



第2図　Oトレンチ北壁断面図

る。

扇状地の土層堆積は、複雑な状況を呈するものであるが、馬場川遺跡の場合はＳ地点、Ｎ地点においても単純な層位を呈していることと、明らかに違う時期の包含層（昭和49年度のＳ地点のように弥生時代の包含層の直下に縄文時代晩期の包含層が間層もなく堆積している）が接していることなどとともに、この遺跡の層位関係を考える上で注目しなければならない点であろう。

遺構

今回の調査では遺構らしきものは検出できなかった。しかしながら、出土遺物には注目すべきものがある。縄文時代中期末～後期にかけての出土遺物があり、詳細は遺物の項で紹介するのでここでは重複をさけるが馬場川遺跡の開始時期のものとして誤まりはないと思われる。

層位的に縄文式土器を把握するのを試みたが、単一層内に混在して出土したために区別することは困難であり、ここでは特に区別せず、一括遺物として取り扱うことにした。ほとんどのものが第６層中よりの出土であり、中期末～後期初頭の縄文式土器が大量に出土したほか、石錘１点、石鏃２点の出土があった。

出土遺物

〔縄文式土器〕

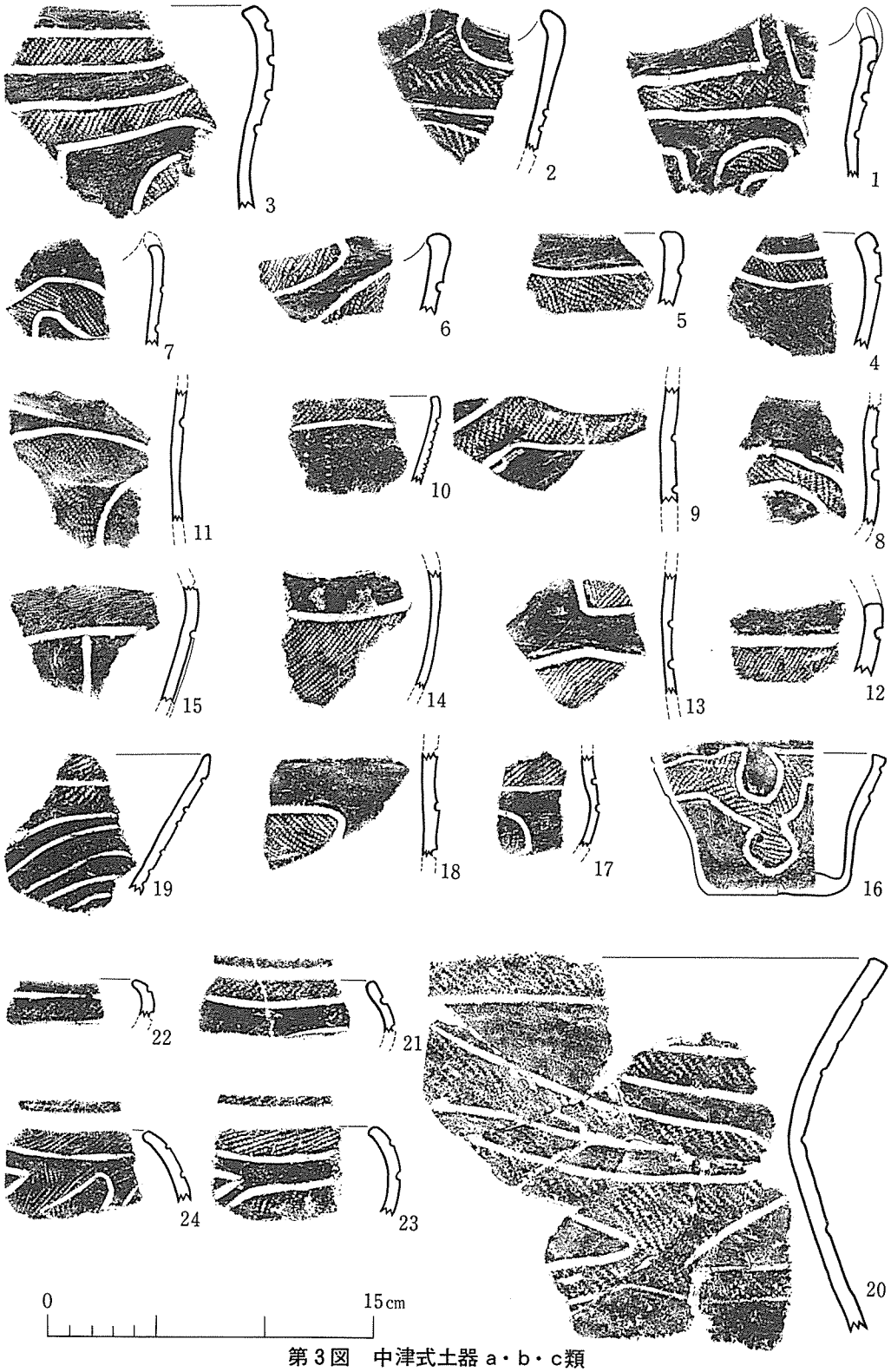
Ｏ地点出土の遺物は、大半を縄文式土器が占め、他に若干の石器類が出土した。縄文式土器は、そのほとんどが第６層内からの出土であり、層位的に区別することはできなかった。本地点出土の縄文式土器を中津式土器、馬場川Ｏ式土器、無文土器に分類を試みた。以下中津式土器より記述をすすめていくことにする。

中津式土器（第３図　図版四　　）

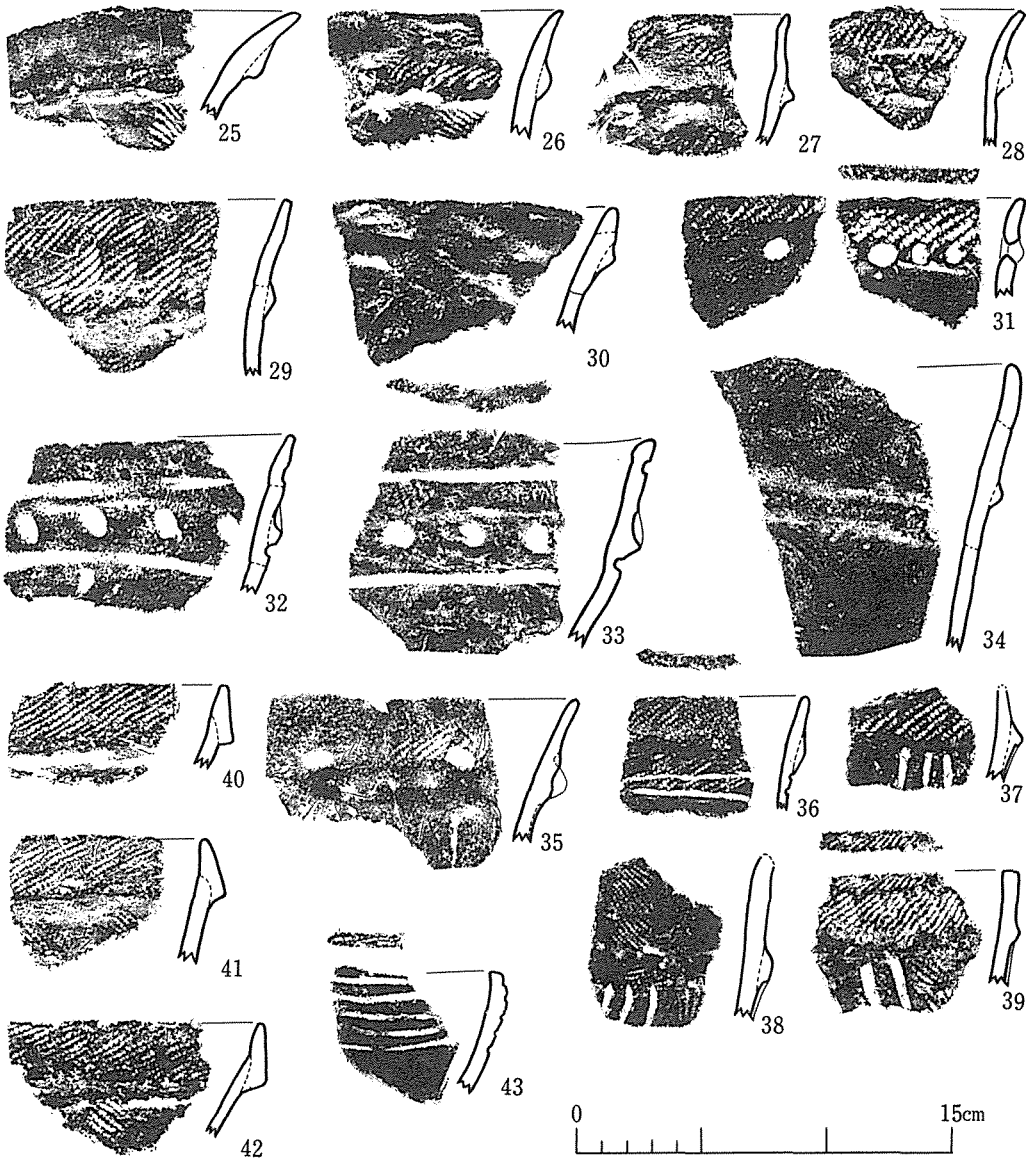
所謂磨消縄文を有する土器であり、口縁部の形態からさらにａ・ｂ・ｃに分類することができる

ａ類（第３図―１～15・17～19　図版四―１～15・17～19）波状口縁をもち、口縁端部を内側に肥厚するもの。三角状の山形口縁をもつことが特徴的である。文様は、巾約 1.5cmの縄文帯を山の部分でつなぎ、胴部で釣針状に下げるものを基本とするが、５のような太い沈線を一条めぐらすこともある。縄文の原体は二段ＲＬとＬＲがほぼ同比率で認められる。色調は、総じて茶褐色を呈し、胎土には石英、長石粒を含む。これらは中津式土器そのものの特徴をそなえていると言える。

ｂ類（第３図―20　図版四―20）平縁の口縁をもつもの。頚部で一旦くびれて外反する。口縁端部は、内傾することなく角をもって終る。文様を太く浅い沈線で三角状に区画構成する。縄文の原体は二段のＲＬである。色調は、灰白色を呈し、石英、長石粒を多く含む胎土である。ａ類とは文様、色調、胎土ともに相異があり、他地域からの搬入品と思われる。



第３図　中津式土器 a・b・c類

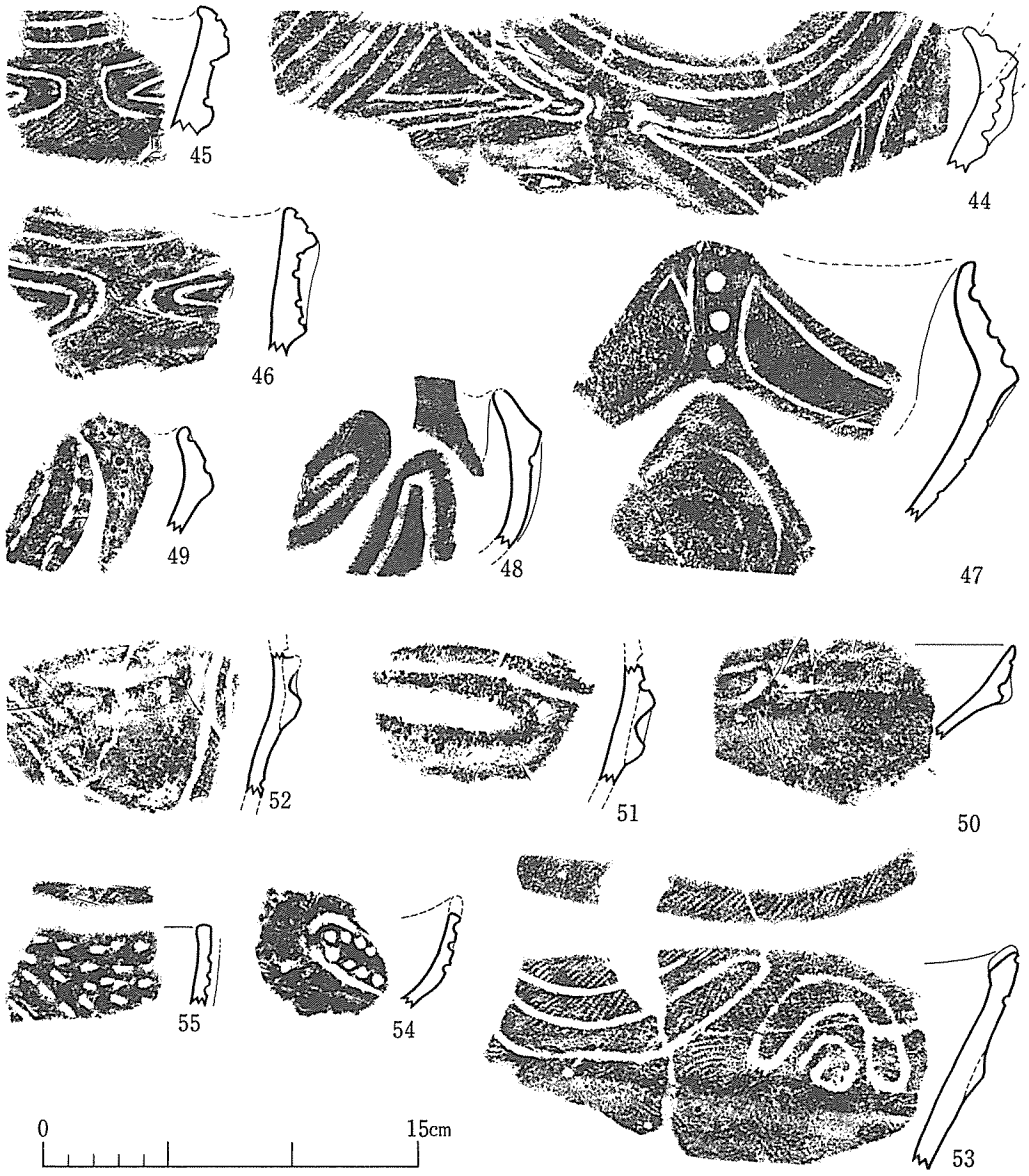


第４図　馬場川Ｏ式土器ａ・ｂ・ｃ類土器拓影

ｃ類（第３図―16・21～24　図版四―16・21～24）浅鉢形の土器で弱く外反する口縁部を端部でわずかに内傾するもの。16は縄文帯を３カ所で円弧状に下げる。色調は茶褐色を呈し、胎土には石英粒をわずかに含む。21･23･24は弯曲する口縁部をもち、口縁部及び口唇部に縄文が認められる。

馬場川Ｏ式土器（第４図、第５図　図版五）

口縁部に隆帯をめぐらし口縁部、口唇部に縄文を施す。口縁部、胴部に縦位に縄文を施すものや垂下沈線を施すものが多い。縄文は二段ＬＲがほとんどを占める。馬場川Ｏ式土器の



第５図　馬場川Ｏ式土器ｄ・ｅ・ｆ類土器拓影

記述をすすめていくためにさらにａ・ｂ・ｃ・ｄ・ｅ・ｆの６類に分類をした。分類はもちろん時期差をしめすものではない。

ａ類（第４図―25～36　図版五―26～32・34～36）口縁端部はやや外反し丸くおわる。口縁部より胴部にかけては、ゆるやかな曲線でつづくと思われる。口縁あるいは口縁直下に隆帯を有し、縦位に縄文を施すものを特徴とする。縄文はＬＲである。色調は総じて茶褐色及び淡褐色を呈し、角閃石、長石、石英粒などを胎土にもつ。隆帯を貼り付けたのちに縄文を施すもの(25･26･27･28･29)そののちに隆帯に指先で刻目を有するもの(31･32･33）などがある。

31は円孔を穿ち、口縁内面にも縄文を施す。色調は14が赤褐色を15は淡褐色を呈し、２～３mm大の石英、長石、角閃石を含む胎土である。27・28は少片であるため全体の形状はわからないが、おそらく隆帯直下より縄文を間隔をあけて縦位に施すものと思われる。25・26は同一個体であるが、これも隆帯直下より胴部にかけて間隔をあけて縦位に縄文を施すものである。色調は茶褐色を呈し、角閃石、２mm大の石英、長石を含む胎土である。

ｂ類（第４図―37～39　図版五―38・39）やや内弯する口縁部をもち、口縁に隆帯をめぐらし、隆帯を境にして文様が変化する。隆帯直下より一単位２～３本の垂下沈線に間隔をあけて縄文を縦位に施すのを特徴としている。口縁部に巾約２cmで横位に縄文を施し、口唇部にも及ぶ。縄文の原体はＬＲである。口縁端部は面をもつ。色調は37・38が茶褐色、39が灰褐色を呈す。

ｃ類（第４図―40～42　図版五―41・42）口縁部に段状のふくらみをもち、拡張した口縁端部に縄文を施し、胴部に間隔をあけて縦位に縄文を施すもの。縄文の原体はＬＲである。42は、胴部に縦位の縄文がわずかに認められる。色調は灰白色を呈し、石英、長石粒を含む胎土である。

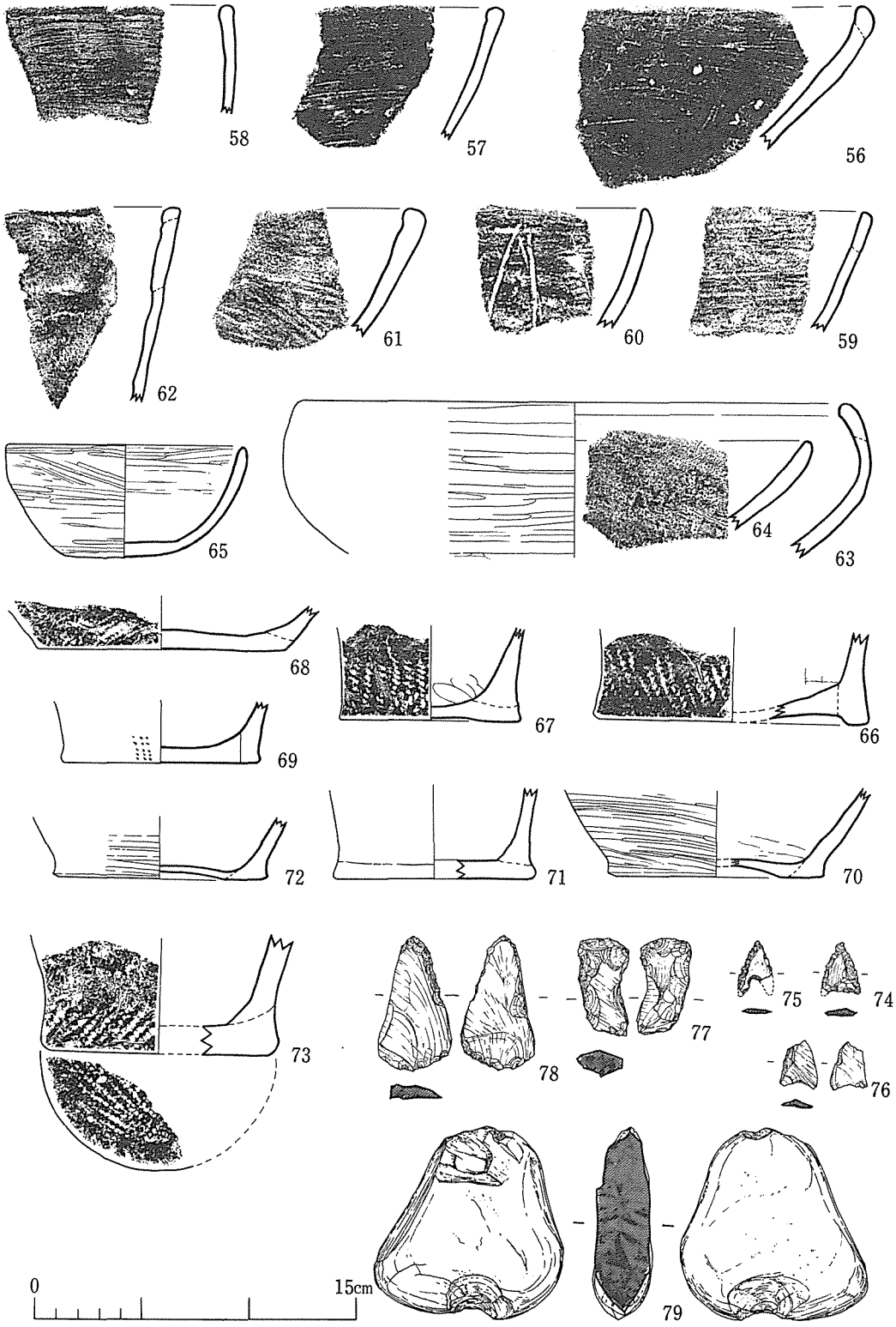
ｄ類（第５図―44～49　図版五―44・46～48）内弯する大きな山形の口縁部をもつ。44は口縁部に連続した隆帯を三角状にめぐらし、隆帯にそって内部に三角状の沈線を施し、口縁部文様帯を構成する。口唇部にも２本の沈線を施し、隆帯上にも縄文を施す。巾 1.5cmと厚手の土器であり、色調は茶褐色を呈し、石英粒、長石粒、角閃石などの砂粒が多い胎土である。44・45・46は同一個体と考えられる。47・48・49は山形の把手部分であり、沈線をめぐらし47は頂部に刺突文をもつ。色調は47・49が淡赤褐色、48が淡褐色を呈す。

ｅ類（第５図―53　図版五―53）口縁部が胴部から外反し、端部でわずかに内傾するもの。53は口縁部に隆帯を一条めぐらし、隆帯を境にして文様が分かれる。隆帯上部、口縁内面に縄文を施し、そののち沈線による円弧、半円弧に文様を施す。色調は、淡褐色を呈している。

ｆ類(第５図―50～52・54・55　図版五―50～52・54・55)縄文をあまり施さないもの。50はゆるく外反する胴上部に稜をもって直立する口縁部をもち、口縁部に沈線による区画文を施す。51・52にも区画文がかすかに見られる。55は口縁部に刺突文を三角状に施し、口唇部に縄文をわずかに施す。43は細い沈線を５本横位にめぐらす。浅鉢形土器かと思われる。色調は赤褐色で馬場川Ｏ式土器のなかに含まれるかどうかわからないが、一応ｆ類の中に入れておきたい。

無文土器（第６図―56～65　図版六―56～65）

所謂粗製土器である。深鉢と浅鉢の２器種がある。深鉢はすべて平縁である。胴部からなだらかに口縁部に移行し、端部をわずかに肥厚して丸く終るものが多い。外面の調整は、横位の条痕によるものがほとんどであり64のようにナデて仕上げているのはわずかである。浅鉢形土器は、口縁を丸く終らせ、63は口径26cmになるものである。外面の調整は条痕による



第６図　馬場川無文土器、底部石器類

色調は総じて淡褐色を呈し、角閃石、石英、長石粒を多く含む胎土である。

底部（第６図―66～73　図版六―66～73）

底部は平底で終るものが出土の大半を占め、わずかに(67・70・72)のようにあげ底を呈するものがある。縄文が胴部下半まで施すもの（66～69・73）が認められるほか、73のように底にまで縄文を施すものもある。

〔石器類〕（第６図―74～79　図版六―74～79）

石器の出土は、ごくわずかであり、そのうち用途のわかるものは石鏃２点、石錘１点だけである。79は石錘。扁平な自然石の両端をうちかき、くり込みを入れる。重さ 280ｇを測る。石鏃２点はサヌカイト製で74は平基無茎式で、断面菱形状を呈す。重さ1.3ｇを測る。75は凹基無茎式の石鏃で、片面は主要剝離面を利用しており断面は平坦になっている。現存での重さ0.9ｇを測る。

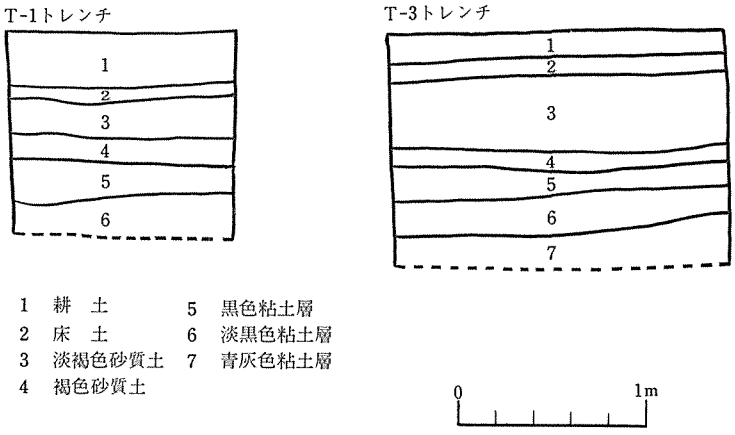
２．Ｔ地点

横小路町３丁目 736番地と、横小路町３丁目1157番地に設定したトレンチをＴ地点とあらたに呼ぶことにした。横小路町３丁目1157番地に設定したトレンチを東から順にＴ－１トレンチ、Ｔ－２トレンチ、Ｔ－３トレンチと呼び、 736番地に設定したトレンチをＴ－４トレンチと呼ぶことにした。

Ｔ地点は、馬場川遺跡の範囲内でも南東の地点にあたり、当初このあたりまでは馬場川遺跡が及んでいるとは考えられなかったが、南限を決定する必要からトレンチを設定し調査を実施した。Ｔ地点の立地は、南を其後川が流れている関係から、この土地を境にして除々に南へ傾斜をもち谷川に続いており、扇状地の最南端とも言える地形である。

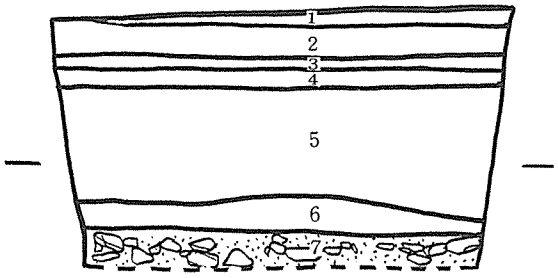
層位

Ｔ－１トレンチ、Ｔ－３トレンチは、ほぼ同様の層位を呈する。層は、凹凸はなくほぼ平坦な状態であった。

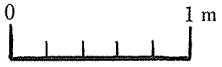


第７図　T-1・T-3トレンチ北壁断面図

地表下約40cmは耕土・床土であり、以下は第3層（淡褐色砂質土)、第4層（褐色砂質土）になり、地表下約70cmで第5層（黒色粘土層)に至る。第5層中より古式土師器の良好な資料が出土した。第6層(淡黒色粘土層)からも若干の古式土師器が出土したが量的には第5層からのものがほとんどである。第5層と第6層の境は、あまり明瞭なものではなく、自然に変化している。



1　盛　土
2　耕　土
3　床　土
4　茶褐色砂層
5　淡灰色砂層（細）
6　淡灰色砂層（粗）
7　礫　層



第8図　T-4トレンチ北壁断面図

さらに第7層直上で精査及び断面観察をおこなったが、遺構等は認められなかった。T－1 T－3トレンチでの古式土師器の包含層は、若干ではあるが、東から西へ傾斜をもっている。さらに縄文時代の包含層の有無を確認する必要から、さらに掘り下げたところ、7層（青灰色粘土層）中より、縄文時代晩期の土器・土製品・石器片などが出土した。第7層は、その下層で砂質土に変化しており、ここでは遺物はほとんど出土しなかった。

T－2トレンチは、上層がほとんど撹乱をうけているため詳細は不明であるが、下層においても茶褐色及び赤褐色の砂層・砂礫層が続いており、T－1トレンチ、T－3トレンチとはかなり様相を異にしている。

T－4トレンチの層位は、地表下約30cmまでは盛土、耕土、床土であり、以下第4層（茶褐色砂層)、第5層（淡灰色砂層)、第6層（礫層）に至っている。第4層、第5層中より、磨滅を著しく受けた土師器の細片が出土したのみで、遺構等は認められなかった。

出土遺物

〔土師器〕（第9図　図版六、八）

土師器は、すべてT－1トレンチ、T－3トレンチから出土したものであり、若干甕形土器などについて細分できうるかもしれないが、ここでは一括して取り扱うことにしたい。

小型丸底土器（第9図—80～85　図版七—80～85）口縁部が内弯しながら上方に大きく開き、頚部はくの字状に屈折して小さな球形の胴部から丸底につづくのを特徴としている。80 83のように口縁部がいったん内弯して中央部で少しふくらみをもち端部で外反するものと、内弯したまま薄く尖って終るもの82・85、わずかに内弯してほぼ直口し、薄く尖って終るもの81・84などがある。口縁部、体部ともに横方向の箆磨きで入念に仕上げたのち、放射状の暗文を施こしている80・81・82。色調は80・81・82は赤褐色、85は橙褐色を呈し、胎土は細砂粒で精良、

良好なものである。

高杯形土器（第９図―86・87　図版七―86・87）杯部の底部と口縁部との境界が鋭く屈折して、口縁部上方にまっすぐに伸びて端部は薄く丸く終っている。外面はハケ目整形ののちナデにより仕上げている。内面はナデにより仕上げている。

脚部は細長い柱状部から屈曲して大きく広がる裾部をもつものであり、裾端部は薄く尖って終っている。外面は縦方向に篦磨きをおこない、内面にはしぼり痕を残こしている。杯部と脚部との接合方法は挿入方式をとっている。色調は赤褐色を呈し、良好な胎土である。

鉢形土器（第９図―88　図版七―88）口縁部は、２段にゆるやかに屈折して外上方にひらき、端部は薄く尖っておわっている。体部は浅く、底部との境をつくらず丸底である。内外面ともナデにより仕上げ、体部外面は横方向の篦磨きが認められる。色調は、淡橙褐色を呈し、細かな砂粒を含む良質な胎土をもつ。

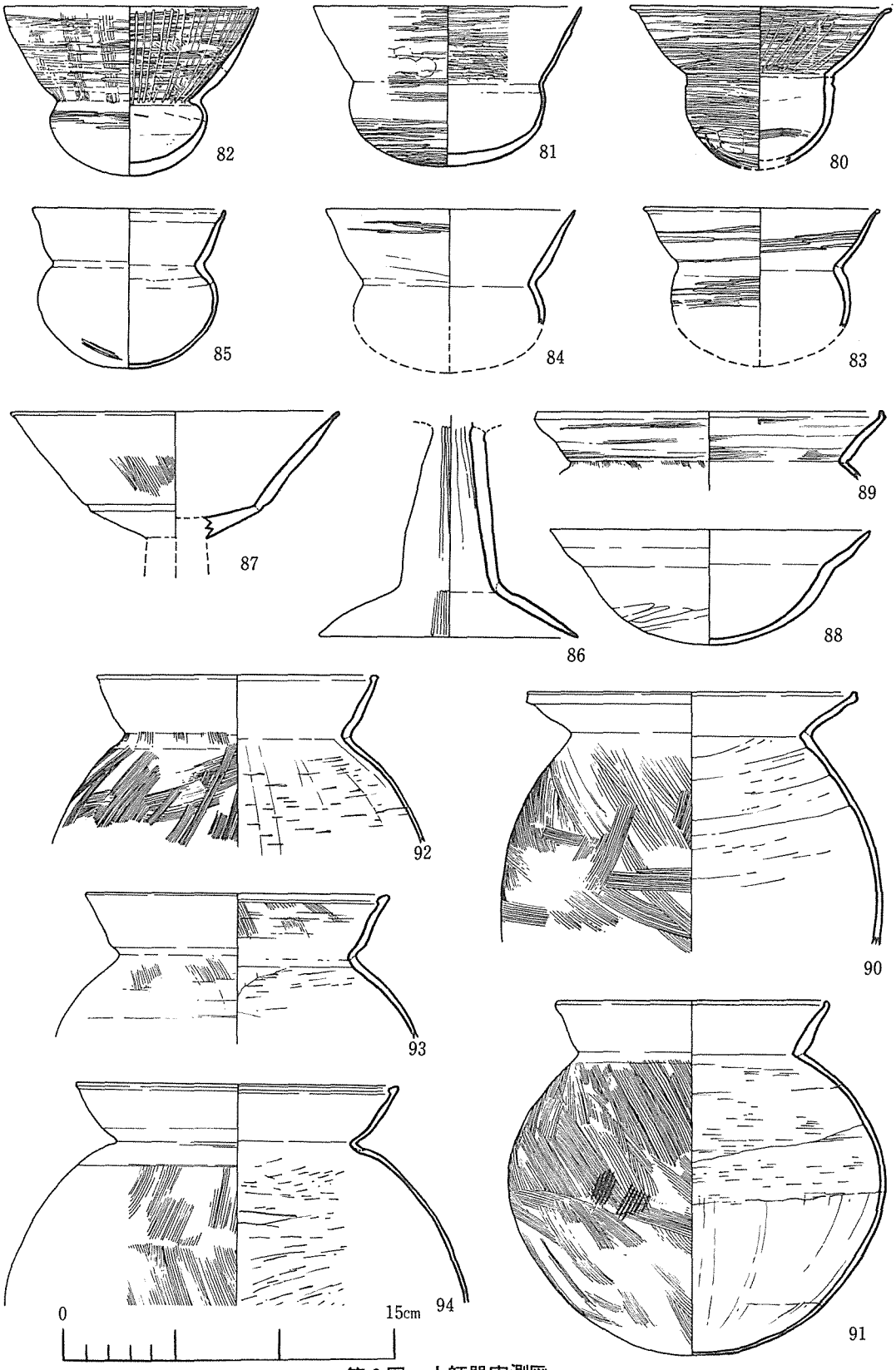
甕形土器（第９図―89～94　図版八）短かく外反する口縁部をもち、端部が内側に肥厚し球形の胴部に丸い底部をもつものを基本としている。しかしながら、口縁部においては若干の相異を指摘することができる。89・90は端部をわずかにつまみ上げるようにつくり出し、端部を拡張している。91は薄く丸く終っている。92は端部を内側に丸く肥厚させている。93・94は内側に肥厚させ、肥厚した面をわずかに内傾させている。口縁部は、内外面とも横ナデをおこなうが、93は口縁内面にハケ目を施したのち、横にナデている。体部は、全体を復元できるものは91を除いてほとんどないが、総じて器壁を薄く、均等に仕上げている。91は内面にテイネイなヘラ削りが認められ、器壁も３～４mmを呈す。外面に叩き目がかすかに認められるところから叩き目を施こしたのちハケ目で仕上げたものであろう。94は体部上面を左方向の篦削りをおこない、下半を左下から右上へ削りあげている。色調は、93・94が淡褐色、90・92が赤褐色を呈し、総じて良好な胎土を呈す。89は茶褐色を呈し、胎土に石英粒、長石、角閃石を含む河内産の特徴をもつ土器である。

〔縄文式土器〕

縄文式土器の出土量はあまり多くなく、また器形が復元できたものもごくわずかであった。その中でも深鉢形土器の口縁部、及び底部が出土しているのが注目される。口縁部と体部との接合部に段をもち、口縁部がわずかに外反する。口縁部はナデにより調整し、丸底及び凹底が認められる。これらの縄文式土器は、破片ばかりで詳細は不明であるが、縄文時代晩期の滋賀里式に比定されるものであろう。

〔土製品〕（表紙カット図　図版八―95）

半球状を呈する土製品であり、口径9.6cm、器高5.8cmをはかるものであり、体部には沈線で格子状に文様帯を有する。内面はわずかに凹みをもつ。この器形の土製品は、昭和49年度調査地点（Ｓ地点）、昭和44年度調査地点（Ｆ地点）においても出土しており、用途は不明である。色調は茶褐色を呈す。



第9図　土師器実測図

第4章　ま　と　め

今回の調査地点であるO・T地点は、馬場川遺跡の西端及び東南端にあたり、両地点とも中心地点からはずれた位置にある。馬場川遺跡は、現在までの調査によって縄文晩期を中心に集落が形成されたと考えられているが、その開始期の様相や南への広がりなどについては不明確な点が多かった。今回の調査は、この不明確な点を解明することにその主たる目的をもっていた。

1．O地点について

O地点は、馬場川遺跡の西端、標高15mのもっとも低い地点にある。O地点を考える上で、昭和45年度に調査がおこなわれたN地点を合わせて考えることが必要である。N地点は、O地点のすぐ東に位置し、距離的には20mと離れていない。このN地点においては、三時期の異なる縄文式土器が出土している。すなわち、晩期の滋賀里式に属する類、後期初頭の中津式に属する類及び今回の馬場川O式に属する類が出土している。[1] これら三類の土器は、層位的に明確に把握するところまでは至っていないが、今後詳細な調査で明らかになると思われる。さて、N地点においても中津式に混って馬場川O式土器の出土が確認されていたわけであるが、これは量的に少なく、一型式として明確に区分できるほどのものではなかった。今回さらに調査範囲を広げた結果、多くの資料を得ることができた。これを馬場川O式土器として一応の区分をすることにした。

馬場川O式土器について

出土した縄文式土器から馬場川O式土器の摘出は、中津式土器、無文土器を取り除いた資料でおこない、文様、口縁部の形態を、まずa・b・c・d・e・f類に分けることからはじめた。各類の特徴は以下のとおりである。

a類　口縁端部がやや外反し丸くおわり、口縁部に隆帯を有し、縦位の縄文を施す。

b類　やや内弯し、面をもっておわる口縁端部をもち、口縁部に隆帯を有し、胴部に一単位2～3本の垂下沈線と縦位の縄文をもつ。

c類　段状にふくらむ口縁部をもち、口縁部に斜縄文・胴部に縦位の縄文をもつ。

d類　内弯する大きな山形の口縁部を有し、口縁部に隆帯、沈線を施す。

e類　口縁端部を内傾し、口縁部の縄文地の上に沈線で文様を施す。

f類　縄文がほとんど見られないもの。

馬場川O式土器の特徴は、a・b・c類がよくその特徴をしめしている。つまり、口縁部に隆帯をもち、口縁直下または胴部にかけて縦位の縄文や垂下沈線を施すのを特徴としている。これらの文様構成は、たがいに重複している。これを表でしめすと次のようになる。

	a類	b類	c類	d類	e類	f類
(1)隆帯をもつもの	○	○		○	○	○
(2)垂下沈線をもつもの		○				
(3)縦ころがしの縄文があるもの	○	○	○			
(4)口唇に縄文があるもの					○	

畿内で馬場川O式土器の特徴をもつ類例の報告がほとんどないため、今回一型式を設定したわけであるが、こまかな特徴でみれば、馬場川O式土器a類の土器は、京都大学農学部構内出土の土器に類似のものがある。[(2)] また、Ob類の土器は、東庄内A遺跡出土の土器に類似のものがある。[(3)] 馬場川O式土器と共伴した中津式土器とは現在までのところ層位的関係は明らかではなく、むしろ今回の出土状態からは、ほぼ同時期に比定することができる。しかしながら、この時期の資料が増えつつあるので、将来的には時期差、地域差でとらえられるものであるかもしれない。馬場川O式土器は、中津式系の土器、加曽利E式系土器の影響をうけながらも、かなり地域色をもった土器の資料で、中期末から後期初頭に位置づけられるものであると考えておきたい。

中津式土器について

中津式土器は、a・b・c類の区分をおこなった。a類は、所謂中津式土器であり、量的に大半を占める。胎土、焼成とも大半が河内のものである。b類は今回の出土土器中では2点だけであった。口縁が平縁で、磨消縄文のモチーフがa類と異なる点から別に取り扱った。胎土、焼成とも河内の土器とはかなり相異があり、他地域からの搬入品であると考えられる。c類は浅鉢形土器であるが、特に完形品である(16)は中津式土器のものとして良好な資料であろう。

O地点出土の土器は、ほぼ中期末から後期初頭の時期に比定することができるが、これは馬場川遺跡では最も古い時期にあたる。馬場川遺跡の始まりは不明であったが、O地点にそれが求められると思われる。今回の調査では遺構は確認できなかったが、O地点とN地点の中間地点の調査が進めば、将来発見される可能性が大きい。今後の調査が期待されるところである。

2．T地点について

T地点は、馬場川遺跡の東南端にあたるが、この地点で縄文式土器が発見されたことは馬

場川遺跡の範囲を決定するについて大きな成果であった。出土した縄文式土器は、少破片ばかりであり、有文土器はまったくなかった。出土した縄文式土器は、大半が深鉢形土器で、晩期滋賀里式に比定されるものであった。この時期の土器は、F～N地点で出土しており、遺跡の大半を占めているが、T地点において発見したことは、遺跡が東南にも広がることを意味している。しかしながら、T地点においてもT—4・T—2トレンチでは包含層は検出されず、複雑な扇状地形のあり方の一端をうかがわせており、今後詳細な調査が必要であろう。

T—1・T—3トレンチで上層から土師器の良好な資料が得られた。土師器は、調査範囲が狭かったにもかかわらず資料は良好であった。このうち、小型丸底壺は、4点がほぼ全体を復元できる。口縁部が大きく広がり、小さな球形の体部をもつもので、内外面とも入念な篦磨きののち、暗文を施し、篦削りは認められなかった。今回出土の小型丸底壺は、大阪府船橋遺跡KⅠa群・HⅠ群[4]、奈良県坂田寺跡下層の小型丸底壺A[5]に類似するが、入念な篦磨きや暗文を施す点、篦削りがまったく認められない点に若干の相異が指摘できる。甕形土器も船橋KⅠa群、坂田寺跡下層甕Aに類似するものが、91のように体部に叩き目をわずかに残し、89のように口縁端部をつまみ上げる特徴をもつものなどが含まれていることなどに若干の相異も認められる。以上のことから、T地点出土の土師器は大阪府東大阪市小若江北遺跡出土の土師器[6]（広義の布留式土器）に含まれるものであるが、船橋遺跡KⅠa群、坂田寺跡下層に類似する点が多いところから、これらと併行もしくは先行するタイプであると考えられ、所謂古式土師器のもっとも古い時期に比定することができる。

T—1・T—3トレンチで検出された土師器の包含層は、約50cm以上の堆積が認められ、これがあまり広くない範囲で分布していることが確認された。馬場川遺跡においては、各地点ごとにわずかに時期差が認められる遺構・遺物が検出されており、それらが互いに重複しながら点々と存在している状態をうかがうことができる。今後、馬場川遺跡の総合的、計画的な発掘調査が望まれる。

注(1) 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報6「馬場川遺跡Ⅱ」1971
(2) 中村徹也、泉　拓良、「京都大学農学部総合館北棟建設予定地内　埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ」1974
(3) 三重県埋蔵文化財調査5『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』1970
(4) 田辺昭三、原口正三、田中　琢、佐原　真「船橋Ⅱ」1962
(5) 安達厚三、木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌第六十号第二巻』1974
(6) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』1956

昭和44年度以前の調査地点
（A ～L ）
昭和45年度調査地点
（N ～S ）
昭和49年度調査地点
（D 1）
昭和50年度調査地点
（O ・T ）
N
P
Q
D 1
D
E
B
R
L K J I H G F
S
N
A
O
C
4
T
2
1
3
0
30m

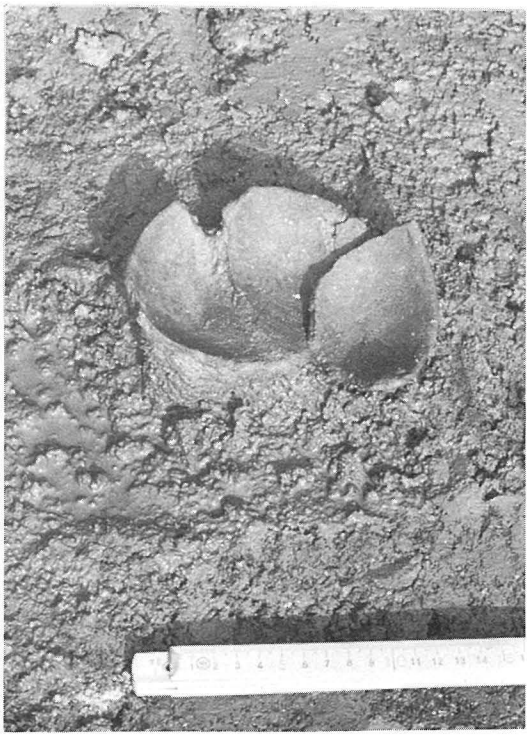
1．O地点調査前の状況

2．O地点調査風景

図版二　O地点土器出土状況

1．中津式b類土器出土状況

2．無文土器出土状況

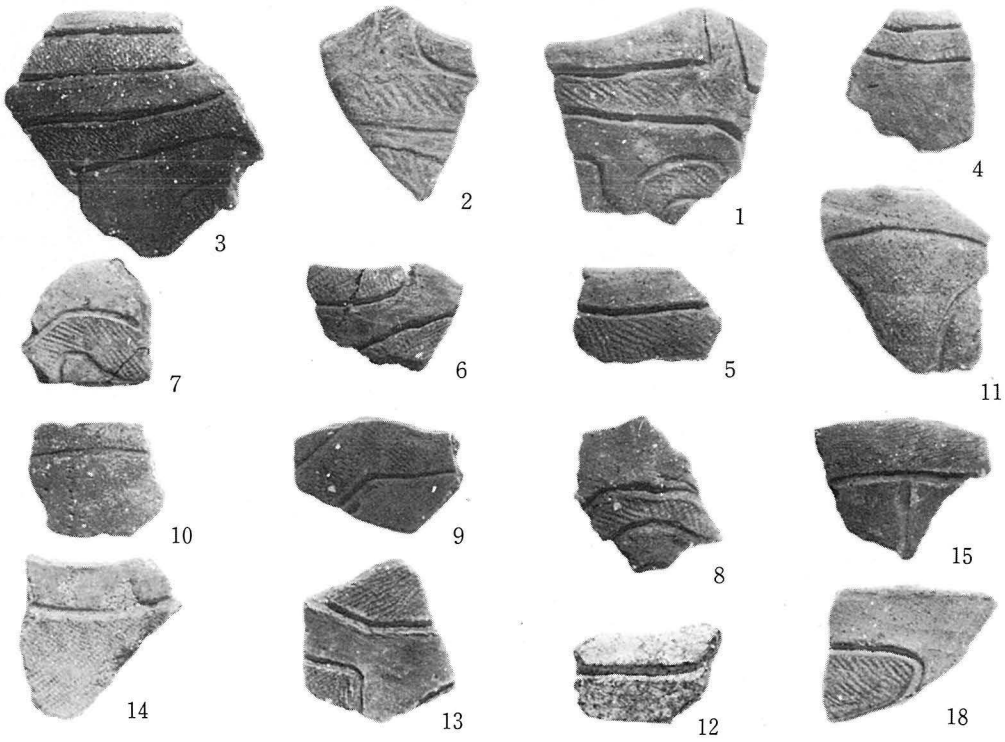


3．浅鉢形土器出土状況

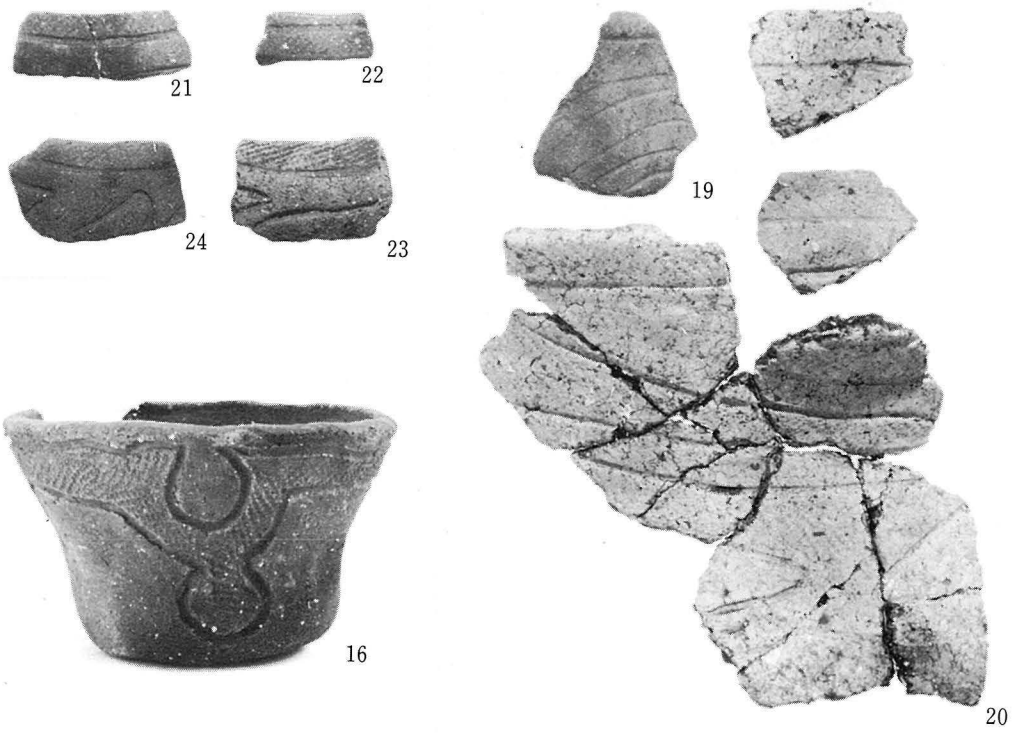
1．Ｔ地点調査前の状況

2．Ｔ―４トレンチ北壁断面

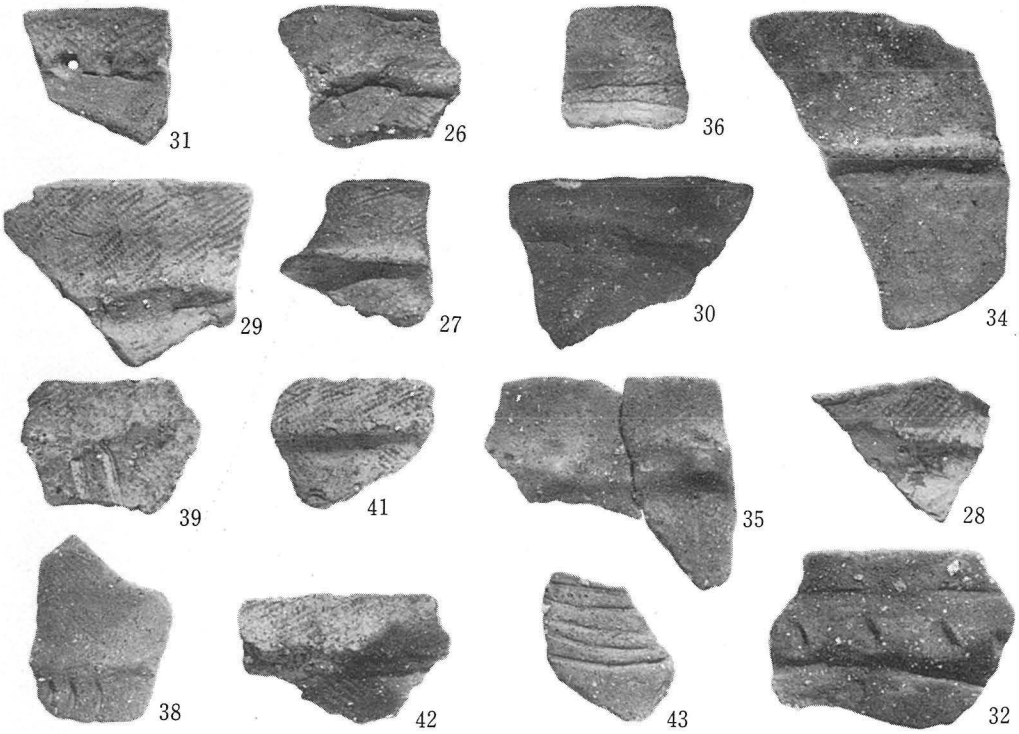
図版四　縄文式土器



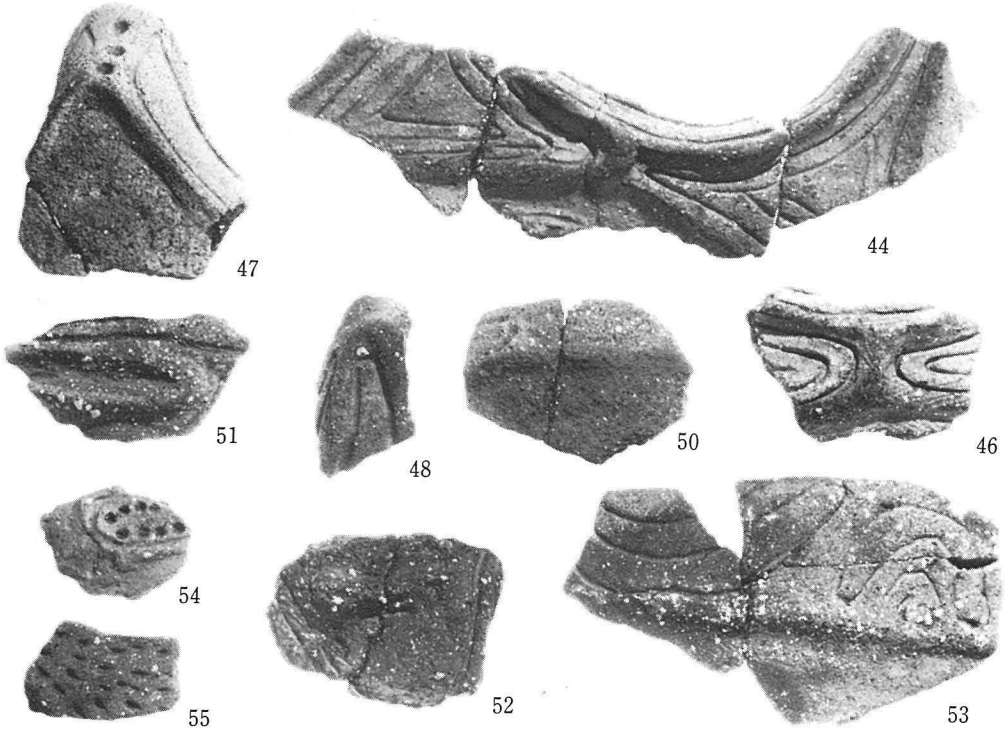
1．中津式土器ａ類



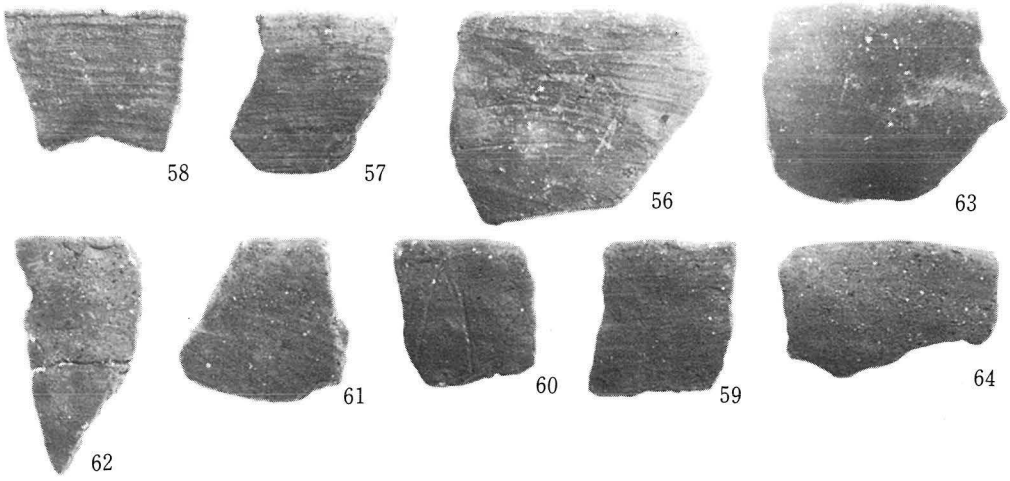
2．中津式土器ｂ・ｃ類



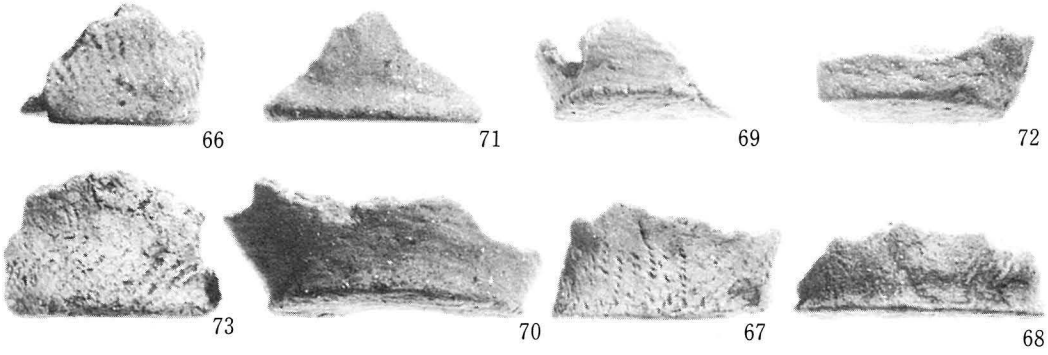
1．馬場川O式土器a・b・c類



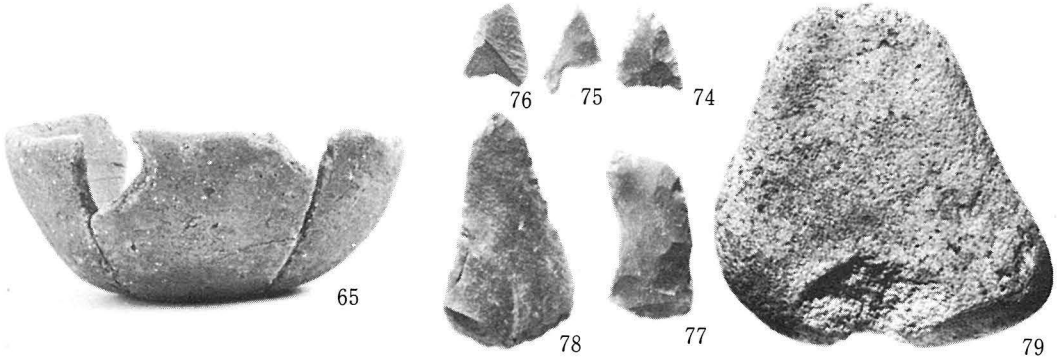
2．馬場川O式土器d・e・f類



1．無文土器



2．縄文式土器底部



3．無文土器、石器類

88

80

87

81

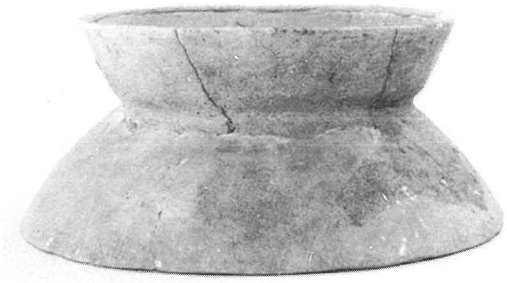
86

82

85

83

1．小型丸底壺、鉢形土器、高杯（杯脚部）



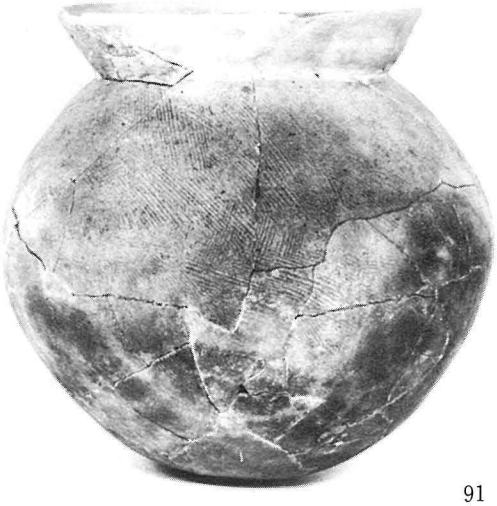
93

92

94

90

95



91

1．甕形土器・土製品

馬場川遺跡発掘調査概要 Ⅳ

昭和51年 3 月31日

発　行　　東大阪市教育委員会

印　刷　　ナニワ印刷株式会社